

影なる王女



第三章

厚く塗りこめられた壁が、室の四方を圧するようにそそり立っていた。人が数人入れるほどの広さながら、板を敷き詰めた床には、何も置かれていない。

室の隅に壁に寄りかかるように、ひとがうづくまっていた。手が届かぬ高さにわずかにくりぬかれた窓からわずかに差し込む日の光に薄暗く照らされ、じつと動かずにいた。

わずかに縮れた髪の毛は腰まで届き、膝頭にうずめた貌かおを覆っていた。粗あらい麻布あさぬのの貫頭衣をまとった、筋が固く盛り上がった伸びやかな手脚は、日の光を浴びずに育ったせいかな、血筋が透けて見えるほど白かった。

壁の一隅に、人の手が入るほどの隙間が穿うたれていた。かすかに人の動く音がして木の椀わんがふたつ、差し入れられた。

膝に押しつけられていた顔が動いた。眼が、ひとつは粟飯あわめじの盛られた、もうひとつは菜を煮た汁の注がれた椀に向けられた。

垢あかにまみれ、整えられず伸びるがままの髪に半ば隠れてたその貌は、女のものだった。通った鼻筋、太くかたちのよい眉、二重瞼の大きな眼、肉厚な唇、頬から顎にかけてのなだらかな曲線。その下に、豊かに実った乳房が息づいていた。

女は、驚くべき跳躍力を見せた。一跳びで室の対面に置かれた椀に飛びつき、水を飲み

干し、飯をむさぼった。

腕が空になると、怯える獣のように左右を見回し、ゆっくりと腕を穴から外に押しやり、ふたたび元いた隅に六尺に近い巨軀を折り曲げ、女童のようにうずくまった。

住吉のおおとものかなむら大伴金村の広壯な邸内には、ひとの出入りが禁じられている小さなとまや苦屋があった。藁を混ぜた土壁で覆われ、その小ささには不釣り合いな、分厚く重いかし檜の扉がついていたが、その扉は堅くかぬき門で閉ざされ、開けられることは滅多にない。矛を構えた兵が三人、常に眼を光らせて苦屋を守っていた。

苦屋に閉じこめられた女が何者なのか、いつからそこにうずくまるようになったか、大伴のひとびとは、固く口を閉ざして語らない。それでも、噂はひそやかに口から口へと伝えられ、いつしか女は「影皇女」と呼ばれるようになった。

その夜、寢屋に忍んできたわかたけるのみこ稚建皇子に、春日郎女は声をひそめて言った。

「まことの名ではない。下部やしもべ婢どもが、そう呼ぶ」

「では、まことの名は？」

「知らぬ」

息を呑んで問う皇子に、郎女は冷たい口調で応えた。

「ただ、先の大王の血を引くもの、と聞いたことがある」

「大王の……」

「息長皇后の腹か、別の妃の腹か、吾は知らぬ。どのような貌か、吾も見たことはない。見ればあるいは……」

郎女は、怯える皇子の眼を見据えた。

「皇子に似ていれば、皇子の妹皇女ということかも」

明日の夜、住吉の邸へ来よ。

郎女はそう伝え、寢屋を去った。

稚建皇子は、まんじりともせず、その日の朝を迎えた。

下部が、外の廊下を、鈴を鳴らして歩いていった。窓から外を見ると、いまだ青い闇に、白銀の光を放つ月が、山の端に浮かんでいる。

皇子は、かたわらに置かれた桶の水で貌を洗い、衣服を整えた。

朝儀が始まる。

今、息長皇后は占人とともに廟堂の奥に籠もり、鹿の骨を焼いて卜占を行っている。群臣が集うた頃合いを見計らって廟堂に出でまし、占いの結果を宣する。その言葉は、詔としてヤマトのすみずみに伝えられる。そして朝儀で宣された詔に、何の意味もないことを、豪族たちは知っている。ものごとはすべて、王宮の奥深い一室で、息長皇后と、密かに呼ばれた豪族——たいいていは大伴金村——との語らいによって決められるのだ。

皇子は廟堂に向いながら、ふと思った。

春日郎女は、吾を影の皇女に会わせると言う。大伴金村はそれを知っているか。息長皇后に、そのことを金村は伝えてはいないか。

皇子は頭を振り、疑念を追い払った。

逡巡はなにもたらさない。この眼で見る。まことを見る。そのあとで何をなすかは、そのときに考えればいい。

住吉の大伴金村の邸は、大きな池を背に建てられている。

その夜、稚建皇子は、邸の裏手の池を、舟で渡ってその苦屋に着いた。

「静かに」

舟から岸に降り立った春日郎女は、しきりと眼差しを四方に動かしつつ、舟底に硬く座ったままの皇子の袖を引きつつ、唇に指をあてた。

池のほとりから、その苦屋の裏壁が見えた。兵士が一名、矛を携えて立っていたが、春日郎女の姿を認めると、矛を地に置いて平伏し、足早に去った。

苦屋の裏壁に近く、こんもりと丈の高い草が生い茂っている。郎女は、その茂みに皇子を導き、壁を指さした。

「その穴から見よ」

たしかに、親指が通るほどの穴が二カ所、穿たれていた。郎女は一つの穴に眼を当てた。

「このなかに……影皇女が……？」

皇子はかすれた声で問うた。郎女はうなずいた。白い貌が硬く強張っていた。

「皇子も見よ」

皇子は、もう一つの穴に眼を当てた。皇子と郎女は、腕が触れるほどの位置で、並んで膝をついた。

皇子の袖の激しく震えが、郎女の袖に伝わり、衣擦れの音をたてた。

穴から見える室内は、薄暗く魚油の灯が焚かれていた。

室の隅に、膝をそろえて折り曲げ、両腕で抱え込み、長く乱れた髪の毛を床に垂らし、うなだれた人影が浮かび上がっていた。

あれが……吾が妹。

脇の下の貫頭衣の合わせ目から、豊かに実った乳房がのぞいているのだから、女には違いなかった。だが、しなやかに筋の乗ったたくましい腕や脚は、骨と皮ばかりの皇子の四肢とはまるで異なり、生まれ持つて備えた力強さを感じさせた。

あれが……まことに吾が妹？

同じ腹から、吾田媛なる女の腹から生まれた妹？

「常には、灯は焚かれない」

郎女の声に、皇子は吾に帰った。郎女は、壁の穴から眼を離し、壁に背をもたせかけ、両脚を揃えて地につけ、池の水面に揺れる月影を眺めていた。

「今宵は、ここを訪^{おと}なう者がある。それゆえ、灯を焚いている」

「訪なうとは、誰が」

「知れたこと」

郎女は、冬の水面のように凍り付いた貌を、ゆつくりと皇子に向けた。

「息長皇后」

ざわざわと、苦屋の周囲の篝火が揺れた。ひとの足音が近づき、密やかな囁^{ささや}きが交わされた。

皇子は郎女を見た。郎女は、唇にひとさし指をあて、何か言おうとした皇子を牽制し、壁に穿たれた穴に右眼を当てた。

皇子もそのようにした。

床に誰の手でか、水を張った木の椀^{わん}が置かれていた。女は壁際にうずくまり、膝を両腕で抱え込み、背中を丸めて頭部を膝頭に押し当てていた。しなやかな脚をも覆っていた髪がかすかに動いた。頭部が、膝頭を離れ、背筋がまっすぐに伸びた。こちらに背を向けていて、その面もちまでは伺えない。

女は、腕を伸ばして椀をとった。両手で椀を持ち、顎をあげてなかの水を流し込んだ。喉を鳴らして一息に飲み干した後、椀を持ったまま、周囲を見回した。

こちらに貌を向けたとき、皇子は、右眼を壁の穴に押しつけたまま、膝を両手で強くつ

かんだ。

灯火は彼女の背の向こうにあり、貌は影になって見えない。

不意に彼女は椀を投げ出し、両腕でからだを抱えた。激しく痙攣し、あおむけに倒れ、やがて動かなくなった。

「椀の水には、薬が入っている」

春日郎女が、穴から苦屋のなかを覗いたまま、声を低めて囁いた。

「薬？」

皇子が問うと、郎女は同じ調子で続けた。

「見よ」

皇子は再び、穴を覗いた。

ぎしりと音をたたて苦屋の扉が開いた。

甲冑をまとい、腰に剣を差した兵士が三人、苦屋に入ってきた。彼らは、ゆつくりと床に倒れた女を囲むように近寄った。一人の兵士が、剣を抜いて女の喉にあて、もう一人が、その脇腹を軽く蹴った。

女は身じろぎもしなかった。

兵士たちは貌を見合わせ、うなずきあった。一人の兵士が、天井の梁に、荒縄を投げて引っかけた。荒縄が二本、梁からぶら下がった。ほかの二人の兵士が、荒縄の先端を、女

の左右の手首に巻き付け、きつく縛った。それからもう一方の先端を強く引いた。

女は、天井から吊り下げられた。意識はないらしく、貌は垂れ下がっている。もう一人の兵士が、彼女の左右の足首に縄を巻き付けている間、他の二人の兵士が、大きな石をふたつ運び込んだ。そして、足首を縛った縄の先端を、石に結びつけた。

兵士たちは、苦屋から出た。

女は、四肢を広げたかたちそのまま動かなかった。頭を垂れたその様は、彼女がまだ目ざめていないことを示していた。

「この女は……」

郎女の声がした。

「生まれたときから、この苦屋に閉じこめられている」

「何故に……」

皇子は、強い手で心臓を掴まれているかのような、胸苦しさを覚えた。

「知らぬ」

郎女の声は、乾いていた。

「ただ……三年前、見張りの兵が、彼女を姦そうとした。剣を帯びた三人の兵を、女は素手で殺した」

皇子は、郎女を見た。郎女は、壁に貌を押しつけたまま、続けた。

「故に、苦屋に入らねばならぬ時は、その前に漢部の医師が煎じた水薬を飲ませ、眠らせ

る」

皇子は、再び苦屋のなかを覗いた。

女は、身の丈は六尺を越えていようか。さきほど苦屋に入って女を縛り上げたどの兵士よりも、頭ひとつ高かった。肩幅は広く、胸乳は瓜の実のように大きく、腹部は引き締まり、腰は大きく健やかに張っている。

あれが吾が妹……？

皇子は最前の問いを、繰り返した。

三人の屈強な兵どもを、素手で殺した……？

「来た」

郎女が小さく、しかし鋭くささやいた。

苦屋の向こう側に、複数のひとの足音が、秘めやかな笑いさざめきが、そして松明の火影が近寄ってきた。

首を伸ばしてそちらを窺おうとした皇子の肩を、郎女の掌がつかんだ。皇子が見ると、

郎女は厳しい眼でにらみつけ、視線を壁の穴に向けた。

皇子は郎女に従い、穴に眼を近づけた。

苦屋の門が外され、扉が重い軋みをたてて開かれ、室の内がにわかにもろく照らし出された。

皇子は息を呑んだ。

入ってきたのは、息長皇后と、三人の宮女たち、八須女、香和女、葉津女だった。

四人の女たちは、肌が透ける薄絹をまとい、手に笞や荒縄を提げ、腰帯に短い剣を佩いていた。貌には、鮮やかな紅が毒々しく隈取られている。

彼女らに従っていた兵どもが、拝礼して去り、再び扉を閉めた。

香和女が室の四方に土器の灯火を並べ、葉津女は一隅に木の膳を据え、酒や椀、皿に盛った肉や木の実を置いた。

息長皇后は、八須女が酒を注いだ椀に口をつけ、薄く笑いを浮かべながら、天井から吊された女の四肢を、舐めるように見つめ、つぶやいた。

「似ている」

八須女が、微笑んで皇后を見やった。皇后はその笑みに応えた。

「見れば、見るほどに、似てくる」

皇后は、椀の酒を飲み干して立ち上がり、ぐったりとうなだれる女の頬を、激しく打った。

女は眼を開け、臃おぼろな面もちで自分を打った相手を見つめていたが、不意に悲鳴をあげ、激しく身をゆすり、皇后から少しでも身を離そうと、腰を引いた。

皇后は、女の髪の毛をつかんだ。女はまた悲鳴をあげた。皇后は、その股間を膝で蹴り上げた。女は身を折り曲げ、激しく咳き込んだ。

「吾を辱めた、ただひとりの女……」

皇后は、拳を突き上げて、女の豊かな胸乳を打った。女はのけぞり、絶望的な呻きをもらした。

皇后の貌から笑みが消えていた。苦痛に悶え苦しむ女を凝然と見据えつつ、乾いた声を肉厚な唇から漏らした。

「吾田媛……」

皇子の身体は、雨に討たれたように強張り、細かく震えていた。母なる皇后が、四肢の自由を奪われた女をいたぶる様に、全身の血が脳に集まり、眼球が飛び出しそうに脈を打った。

アダヒメ。

比叡の山の狂女の言葉を信じれば、吾田媛は、稚建皇子と影皇女を産んだ。いま、半裸で天井から吊され、無力なままに苛まれている女を、皇后は吾田媛と似ている、と言った。

吾田媛は、たしかにこの世に在った。その吾田媛に似る女は、影皇女に他なるまい。

そして、影皇女は……、吾が妹？

皇后は、吊された女から離れ、床に座した。八須女がすばやく、その唇に山の木の実を押し当てる。皇后は、紅色の木の實を口に含み、ゆつくりと唇を動かす。

香和女と葉津女が立ち上がり、身を屈めて悶える女の左右の乳首をつまみ、強くひねり

あげた。女は身をそらし、絶叫した。二人の宮女はけたたましく笑った。葉津女が、その腹部に肘を打ち付ける。女は再び、軀を折り曲げた。香和女が、彼女の陰部を蹴り上げる。女の膝が落ち、くずおれそうになりながら、梁に固定された荒縄がそれを許さない。

若い宮女たちは、笞を手にとり、女の身体をつづけさまに打った。女の白い肌、醜い蚯蚓腫れが次々と生まれた。女は泣き叫び、身をよじり、激しく呻いた。香和女と葉津女は、虫をいたぶる童のように、眼を輝かせ、敏感な箇所を責め続けた。

皇后は、酒碗を口に含み、悠然と壁にもたれてその様を眺めている。八須女は、皇后の足下にぬかずき、つま先を舌で舐めはじめた。足の指をていねいに舐め、その舌先はふくらはぎに、腿にと次第にせり上がり、やがて脚の付け根に貌を埋めた。

「汝は哀れなり……哀れなるが」

皇后は陶然と、唇を半ば開き、身をくねらせ、荒い息遣いで、言った。

「あの女の腹に生まれた者の定め……」

皇后は眼を閉じ、自らの胸乳を愛撫し、やがて大きくのけぞり、軀を強張らせ、骨が溶けたように筋を弛緩させた。八須女はその唇に、己が唇を重ねた。

「香和女、葉津女」

しばらくして眼を開けた皇后はゆっくりと立ち上がり、二人の宮女に顎で合図した。宮女たちは、吊された女から離れた。

皇后は、うなだれて苦痛に耐えている女の髪の毛をつかみ、貌をあげさせた。女は、う

つろな眼で皇后を見、哀願するように唇を動かした。皇后は笑い、その貌に唾をはきかけ、つづいて鳩尾みぞおちを膝で蹴り上げた。女は呻き、嗚咽した。

「八須女。灯火を」

八須女が手渡した灯火を、皇后は女の陰部にあてがった。火が、女の陰の毛を焼いた。

女は弓のように大きく仰け反り、激しく震え、おそろしい悲鳴をあげた。皇后は、その陰部を膝で蹴り上げた。

この間、葉津女と香和女は、互いの軀を舐めあっていた。

春日郎女は穴から眼をそむけて、深く息をついた。

皇后は、月に一度、宮女たちを伴ってこの苦屋に入り、夜が明けぬうちに帰っていく。そこで何が行われているか、郎女は知らなかった。ただ、皇后が去った明るる朝、兵士どもが苦屋から血や汚物にまみれた布を運び出しているのを見たことがある。

皇后が来ない日は、女はただ、狭い苦屋に閉じこめられ、息をしているだけの存在だった。ひとと話すこともなく、外の世界を見ることもない。月に一度、夜を尽くして苛まれる。皇后が懐く、吾田媛なるものへの恨み——それが何故の恨みか郎女は知らないが——を晴らされるだけに生きている。

郎女は、恐怖と嫌悪感に、嘔吐を覚えた。

ふと、かすかに空気が揺れているのに気づいた。郎女は、傍らをそっと見やった。

稚建皇子は、地に臥せて背を細かく震わせていた。
皇子は、声をしのばせて慟哭していた。

月が山の端に隠れようとするころ、皇后は苦屋を出た。
女たちのけだるい笑いさざめきが去り、苦屋の四囲は闇と静寂に包まれた。

「皇子」

春日郎女は、貌を土に埋めて嗚咽する皇子の背にそつと手を載せた。

「皇后は去った」

皇子は貌をあげた。眼の縁が赤く腫れ上がり、涙で潤んだ瞳が、すがるように郎女に向けられていた。

「郎女」

皇子は、鼻をすすりながら、声を絞り出した。

「かようなことが……ずつと……」

「皇后は月に一度、ここを訪なう」

郎女は硬い声音で応えた。皇子の貌が歪んだ。その純粹な悲しみに満ちあふれた貌が、郎女の胸の奥底にわだかまっていた嫌悪感を、別の感情に変えた。

「そのたびに……」

「然り」

郎女は、冷たく貌を背け、立ち上がった。

「皇子よ。じきに夜が明ける。下部に王宮まで送らせる」

踵を返し、舟がつながれてある池に向かって歩き出した。後をついてくる気配がない。

振り返ると、皇子は両手で貌を覆い、背を震わせて嗚咽していた。

「皇子」

郎女は苛立たしげに、皇子の傍らに駆け寄り、肩を揺すぶった。

「疾とく立たれよ。邸の者どもに気づかれる」

皇子は動こうとはしなかった。

「皇子。哭ないて如何する。哭いても、何も変わらぬ」

「吾は……」

皇子は貌をあげた。

「妹を……救いたい」

「如何にして」

郎女は突き放すように言い放ち、自らの物言いに胸が締め上げられるような苦しさを覚え、それが妬ねたみであることに気づき、狼狽うろたえた。

皇子は、袖で涙を拭って立ち上がった。郎女は、その袖を引き、池に向かおうとした。

だが、皇子は、郎女が向かうのとは反対の方角に歩きはじめた。

「皇子！」

郎女は思わず叫び、引き留めようとしたが、皇子は、意外な力で郎女を引きずるように、苦屋の扉の前に出た。

見張りの兵士たちが、思わぬ人影の出現に、矛を構えた。郎女は、誰何しようとする兵どもを、凜とした声音で制した。

「吾は春日郎女。彼は稚建皇子」

兵士たちは互いに貌を見合わせ、いそいで地に伏し、額づいた。

「扉を開けよ」

皇子が命じた。兵士たちはおそるおそる貌をあげ、春日郎女を窺った。

「開けよ！」

皇子が叫んだ。

「皇子、静かに！」

郎女は必死に皇子の口を袖で覆い、兵士たちに、眼で合図した。

兵士たちは、扉に走り寄り、門を外した。

扉を開き、再び閉まる重い響きと、床を鳴らす足音に、いましめを解かれ、闇のなかで傷つきうずくまっていた女は跳ね起き、室の隅に後ずさった。

灯火に照らされたその貌は、恐怖に引きつっていた。

扉が開き、人が入る。その後には必ず、恐ろしい責め苛みが続く。

彼女はずっと、そのように生きてきた。

皇子の眼から、また涙が湧き水のように噴き出した。

「吾が妹……」

皇子は、床に膝をつき、そっと彼女ににじり寄った。

女は貌を歪め、後ずさった。

「吾は、汝が兄。汝に何もせぬ」

皇子の背後に、春日郎女が灯火を手に立っていた。その明かりが、女の貌を、ほのぐらく照らしていた。

右の眼の下に、黒ずんだ影がある……。よく見れば、それは固まった血であった。皇子は思わず、手を伸ばして傷口に触れようとした。

女は短く叫び、その掌に噛みついた。

春日郎女は、一歩足を踏み出した。

「郎女」

皇子は、掌に噛みつかれたまま、身じろぎもせず、言った。

「水を……」

「水？」

郎女は、意外な皇子の言葉に、足を止めた。

「疾う水を！」

皇子が声を高くした。女は、きつく皇子の手をかみしめ、齒が食い込んだ肌から血が滲み出ている。

郎女は、扉を叩いた。兵士が扉を開け、貌をのぞかせた。

「水を」

郎女は短く命じた。

やがて兵士が、水の入った椀を運んできた。

「閉めよ」

郎女の低く鋭い声に、兵士は扉を閉めた。郎女は皇子の傍らに膝をつき、椀を差し出した。

皇子は、貌を歪めて苦痛に耐えていた。女に噛まれた手は、流れ出る血で真っ赤に染まっていた。

「布はあるか」

皇子が問うた。郎女は周囲を見回した。それらしきものはない。

皇子は、左の袖を口に含み、引き裂いた。その端切れを椀に浸し、女の貌の傷口にそつと当てた。

女は、皇子の手から口を離した。

皇子は、そつと彼女の貌の血を拭った。

女は、不思議そうな面もちで、皇子を見つめた。

「哀れなり……」

皇子はさらに、彼女の鎖骨のあたりの血を拭った。

「吾が妹よ……」

女は、小鳥のように首を左右に傾げ、口を半ば開けて瞬きもせず、突然現れた見知らぬ男を見つめていた。

皇子は、涙を流しながら、女の傷を水で浄めつづけた。

そして、不意に彼女の肩をつかみ、顔を伏し、声をあげて哭いた。

「吾が妹よ……」

皇子は啜り泣きながら、きれぎれに言葉を続けた。

「吾は、汝を救う。必ず救う」

「皇子よ」

背後で春日郎女が、しわがれた声で言った。

「この女は……言葉を解さない」

皇子は、一瞬振り向き、また女に向き直った。

「吾は」

皇子は、まっすぐに女を見つめ、ゆっくりと言葉を押し出した。

「汝が兄」

「あ……」

女が、唇を半ば開けたまま、はじめて声を発した。

「兄」

「あ……」

「兄」

「あ……い……」

「あ……に……」

「あ……に……」

「然り」

皇子は微笑み、何度もうなずいた。

「あ……に……」

女が繰り返した。皇子は、眼を細め、またうなずいた。

女が笑った。

澄んだ眼で皇子を見つめ、うれしそうに笑った。

「汝が兄は、必ず汝を救う」

皇子は立ち上がり、振り向いた。

「郎女……」

皇子は、女と同様に、ひどく澄み渡った眼で、郎女を見た。

「吾が妹を、だいに扱え」

郎女は、またも狼狽えた。かほどに、堂々とした面もちを、皇子は見せたことがなかった。

「そう、金村に伝えよ」

郎女は、言葉返すことができなかった。

「必ず……」

皇子は強く、言った。

「金村に伝えよ」

皇子は、女の頬を撫で、踵を返して扉に向かった。

その袖を、女が身を起こし、つかんだ。

皇子は振り返った。

女は、さきほど噛んだ皇子の手の甲の傷に唇を押し当て、舐めはじめた。嘔き出した血を、吾が子を舐める犬のように、残らず舐め浄めた。

翌日。

難波の王宮では、慌ただしく下部や兵士が行き交った。

稚建皇子が、何も告げず、下部を一人連れたまま、忽然と姿を消したからである。